

## 母性理念の生成過程に関する基礎的研究：講義・実習等の影響による医療系短大の学年間比較

著者	高橋 清子, 堀川 悦夫, 佐藤 喜根子, 小原 祥子, 高林 俊文
雑誌名	東北大学医療技術短期大学部紀要 = Bulletin of College of Medical Sciences, Tohoku University
巻	4
号	2
ページ	193-200
発行年	1995-09-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/33602">http://hdl.handle.net/10097/33602</a>

## 母性理念の生成過程に関する基礎的研究

—— 講義・実習等の影響による医療系短大の学年間比較 ——

高橋清子, 堀川悦夫\*, 佐藤喜根子  
小原祥子, 高林俊文

東北大学医療技術短期大学部専攻科助産学特別専攻

\* 東北大学医療技術短期大学部一般教育

## A Fundamental Study of Formation Process of Maternal Ideas —— A Comparison of the Influence of Lecture and Practices between Three Graders in Nursing College ——

Kiyoko TAKAHASHI, Etsuo HORIKAWA\*, Kineko SATO  
Sachiko OBARA and Toshifumi TAKABAYASHI

*Course of Maternity Nursing, College of Medical Sciences, Tohoku University*

\* *General Education, College of Medical Sciences, Tohoku University*

Key words: 母性理念, 学年間比較, 看護学生, 助産学生

Maternity means the characteristics of females which are concerned with children or child care. Maternal ideas are considered to form and change through various experiences in growth and later life.

In nursing junior colleges, the education of the theory and practice of maternity nursing constitutes a part of the expert education. We carried out an investigation aiming to clarify the influence of the education upon the formation of maternal ideas. The subjects were 1st- and 3rd-grade nursing students and the students majoring in midwifery, who totaled to 184. In this investigation, Hanazawa's maternal ideas questionnaire was used. The questionnaire is made up of 27 affirmative or negative questions.

The number of collection was 125 (75%). The data of the 3 groups were analyzed by means of one way analysis of variance and multiple comparison. The result showed that significant difference was found in 7 affirmative and 3 negative questions at 1-5% level of significance.

These 10 items were examined in more detail, focused on their relations with the education of the theory and practice of maternity nursing. 1st-grade students showed little influence of the education and only held general ideas of maternity. 3rd-grade students, on the other, were likely to look upon maternity as a sex role maybe partly due to their clinical practices. The students majoring in midwifery understood not only maternal ideas themselves but also their medical or social aspects and it was speculated that they were much influenced through their clinical practices.

## はじめに

母性とは、広辞苑（第四版）によれば「女性が母として持っている特質、また、母たるもの」と記されている。花沢は児に対する母親としての関わり、あるいは母親らしい関わりに示される女性のパーソナリティの一面<sup>1)</sup>としている。いわゆる母性は児との関連において考えられる概念である。そして、母性理念は自分はどうのような母親であるべきかという母親の態度や価値観であり、母性意識の一面を表している。<sup>1)</sup>

花沢の研究において、初めて妊娠と医師から告げられたときの感慨は、それまでの生活体験を基盤として個人のうちに生成された母性理念によって大きく影響を受けているという結果から、花沢は青年期における母性理念の形成に対する配慮の必要性<sup>1)</sup>を主張している。

看護短大で学んでいる学生の多くは青年期にあり、その教育の特殊性から母性に関する理論と実践が専門科目として指定され、母性看護の修得を目指している。種々の研究報告<sup>2)~4)</sup>によれば母性看護に関する教育は母性意識の発達に役立っているとされる。

今回、我々は視点を変えて、看護教育及び助産学教育で行われている母性に関する理論・実践が学生の母性理念の変容・形成にどのように関与しているのか、またそれ以外に一般的に関係する要因も考え、合わせて学年間の差に注目してみた。対象を看護短大1年生、同じく3年生及び助産学を専攻している学生に対し、花沢式母性理念質問紙を用いて調査し、母性理念の変容・形成に関する学年間の比較を検討した。その結果いくつかの知見を得たので報告する。

## 方 法

### I. 調査期間

1994年11月25日～同年12月9日

### II. 調査対象とその教育背景

調査対象を以下の3群とし、それぞれ母性看護に関する講義・実習を単位数と実習進捗で示して

教育背景とした。

1群 東北大学医療技術短期大学部看護学科平成6年度に在籍した1年次学生（以下1年生と称す）81名である。母性に関する講義・実習はまだ計画されていない。

年齢中は18歳～22歳で、平均年齢は19歳である。有職経験者はいなかった。

2群 東北大学医療技術短期大学部看護学科平成6年度に在籍した3年次学生（以下3年生と称す）83名である。母性に関する講義は5単位であり、この調査時点では既に終了していた。

母性看護学実習は3単位3週間である。3～4名のグループで産婦（新生児を含む）、褥婦、妊婦に関する実習を各々1週間行う。

年齢中は20歳～26歳で平均年齢は21歳である。1名有職経験者はいたが母性看護とは関係なかった。

3群 東北大学医療技術短期大学部専攻科助産学特別専攻に平成6年度に在籍した学生（以下専攻科学生と称す）20名である。

母性に関する講義は19単位、実習は11単位である。専門科目の講義は既に終了し実習は8単位目の習得時期にあった。実習は妊婦・産婦・褥婦を個別に受け持ち技術や知識の提供を行っている、いわば実習の佳境にあった。

年齢中は、21歳～31歳で平均年齢は23歳である。20名中2名は臨床経験7年を有していたが母性看護の経験はなかった。

調査対象数は、1群、2群、3群合わせて184名であり、平均年齢は21歳である。

### III. 調査質問紙

花沢式母性理念質問紙を使用し、無記名回答とした。

この質問紙は、27の母性理念の質問項目より成っている。このうち18項目は肯定質問項目（伝統的母親役割を肯定する内容の項目）、9項目は否定質問項目（伝統的母親役割を否定する内容の項

目)である。各項目は5段階に分かれており、これに得点を配分して「非常にそう思う」を2点、「そう思う」を1点、「どちらともいえない」を0点、「ちがう」を-1点、「非常にちがう」を-2点とした。これらの得点を一元配置分散分析及びScheffeの方法による多重比較を用いて検討した。

#### IV. 回収率

専攻科の20名には個別に配布し回収した。その他の学生164名にはクラス代表を通して配布し回収した。

1年生は69名、85%であり、3年生は37名、45%、専攻科は19名、95%で、合計125名、75%の回収率であった。3年生の回収率が低かったのは、調査時期が実習の最中であって、周知徹底しにくい状態にあったためである。

#### V. 結果

184名中125名を分析対象とした。分析は、コーディングされた後、統計解析ソフトSPSSを用いて行われた。

##### 1 肯定・否定得点の比較

###### (1) 調査対象全体の分析

各質問項目に対する反応は花沢(1992)の分類に基づき、肯定得点と否定得点を算出し比較された。肯定得点の対象となった質問項目番号は、1, 2, 4, 5, 7, 8, 10, 11, 13, 14, 16, 17, 19, 20, 22, 23, 25, 26の18項目、否定得点の対象となった質問項目番号は、3, 6, 9, 12, 15, 18, 21, 24, 27の9項目であった。

分析対象となった125名全体の記述統計結果を、表1に示す。本論文での分析対象者が一般的にどのような傾向を持っているのかを検討するため、125名全体の結果を花沢(1992)の初産婦と経産婦での結果と比較してみた。肯定得点では、花沢(1992)において(表2)は、初産婦の場合、妊娠歓喜群で平均15.0点、妊娠困惑群で平均10.3点、経産婦では妊娠歓喜群で平均18.5点、妊娠困惑群で平均14.1点であった。今回の調査対象者の平均肯定得点8.87点は、初産婦の妊娠困惑群よりもやや低い値を示している。一方、否定得点においては花沢(1992)の結果(表3)では、初産婦の

表1. 調査者全体の記述統計結果

	平均	標準偏差	最小値	最大値
肯定点	8.87	8.47	-20.00	29.00
否定点	-1.97	3.57	-12.00	7.00

表2. 母性理念肯定得点の妊娠歓喜-困惑両群間比較  
(花沢(1992)より)

	群	人数	平均	標準偏差	t
初産婦	婦妊娠歓喜群	92	15.0	6.62	3.812
	妊娠困惑群	52	10.3	7.80	**
経産婦	婦妊娠歓喜群	59	18.5	6.96	2.912
	妊娠困惑群	47	14.1	8.49	**

\*\* p<.01

妊娠歓喜群では、平均-3.5点、妊娠困惑群では平均-1.2点、経産婦では妊娠歓喜群で平均-4.3点、妊娠困惑群では平均-1.9点であった。これに対し調査対象者は平均-1.97点であり、これは肯定得点同様に妊娠困惑群よりもやや低い値であった。これらの結果から、今回の調査対象者は、特に妊娠や母性について過大評価することもなく、また何らかの理由で妊娠を過度に否定する傾向もない集団とみなすことができ、調査の結果を一般的なサンプルとして分析や検討していくことに問題はないと言えよう。

###### (2) 学年間比較

肯定得点の学年間の比較を行うため、一元配置

表3. 母性理念否定得点の妊娠歓喜-困惑両群間比較  
(花沢(1992)より)

	群	人数	平均	標準偏差	t
初産婦	婦妊娠歓喜群	92	-3.5	3.28	3.840
	妊娠困惑群	52	-1.2	3.69	**
経産婦	婦妊娠歓喜群	59	-4.3	3.23	3.974
	妊娠困惑群	47	-1.9	3.26	**

\*\* p<.01

分散分析と Scheffe の方法による多重比較を行った。その結果を表 4 に示す。

学年間に、5% 水準で有意差が認められた。そこで多重比較を行った。その結果を表 5 に示す。この結果からは、1 年生と 3 年生の間にもみ 5% 水準で有意差が認められた。

否定得点についても同様の分析を行った。肯定得点と同様に、学年間に 5% 水準で有意差が認められ (表 6)、多重比較の結果 (表 7) からは、専攻科と 3 年生の間にもみ 5% 水準で有意差が認められた。

## 2 母性意識に関する質問紙の各質問項目の分析

肯定・否定得点の分析結果から、学年間に反応の違いが認められた。そしてその内容を更に分析するため、各質問項目の平均評定値を指標とし、上記と同様に、一元配置分散分析と多重比較を用い

表 4. 肯定得点の分散分析結果

	自由度	平方和	平均平方	F 比	P
学年間	2	578.8987	289.4494	4.2428	.0165*
学年内	122	8323.0533	68.2217		
Total	124	8901.9520			

\*  $p < .05$

表 5. 肯定得点学年間の多重比較の結果

1 年生	専攻科学生	3 年生
7.4348	(n.s.)	7.6316 (n.s.)

\*  $p < .05$

表 6. 否定得点の分散分析結果

	自由度	平方和	平均平方	F 比	P
学年間	2	81.7087	40.8543	3.3313	.0390*
学年内	122	1496.1633	12.2636		
Total	124	1577.8720			

\*  $p < .05$

表 7. 否定得点学年間の多重比較の結果

専攻科学生	1 年生	3 年生
-3.6316	(n.s.)	-1.9855 (n.s.)

\*  $p < .05$

て学年間比較を行った。その結果、有意差が認められた肯定項目については表 8 に、否定項目については表 9 に示す。

(1) 有意差の認められた肯定項目について

肯定項目 18 項目の中で有意差の認められた項目は以下の 7 項目 (表 8) であった。

① Q1 妊娠は女性にとって素晴らしい出来事である。

3 群とも高い肯定得点を示していた。1 年生は専攻科学生及び 3 年生に比べて妊娠は素晴らしい出来事という考えに否定的であった。

1 年生は専攻科学生及び 3 年生との間に 5% 水準でそれぞれ有意差が認められた。

② Q10 子供を産んで育てるのは、社会に対する女の務めである。

一元配置分散分析では 5% 水準で有意差を認めたが、多重比較では有意差は認められなかった。

③ Q13 育児は女に向いている仕事であるから、するのが自然である。

専攻科学生と 1 年生はマイナス得点で否定を示しており、3 年生はプラス得点で肯定を示している。3 年生は育児は女の仕事とみている傾向にあった。

3 年生は専攻科学生との間に 5% 水準で、1 年生とは 1% 水準で有意差が認められた。

④ Q14 子供を産んで育てることは自分自身の成長につながる。

3 群とも肯定得点にあった。1 年生は 3 年生及び専攻科学生と比べて子供を育てることの意義をあまり肯定しない傾向の反応を示していた。

1 年生は 3 年生及び専攻科学生との間に 5% 水準でそれぞれ有意差が認められた。

⑤ Q16 子供を産んで育てなければ、女に生まれた甲斐がない。

表 8. 肯定得点の分散分析で有意差が認められた質問項目とその多重比較結果

Q 1 妊娠は、女にとってすばらしい出来事である					
F (2,122)=7.24 P<.01					
1 年生		専攻科学生		3 年生	* 1 年生と専攻科学生及び3年生間で5%水準で有意差あり
1.1594	*	1.6842	n.s.	1.7027	
* 1 年生と専攻科学生及び3年生間で5%水準で有意差あり					
Q 10 子供を産んで育てるのは、社会に対する女の務めである					
F (2,122)=3.20 P<.05					
多重比較の結果有意差なし					
Q 13 育児は女に向いている仕事であるから、するのが自然である					
F (2,122)=6.38 P<.01					
専攻科学生		1 年生		3 年生	* * * 専攻科学生と3年生間で5%水準で、1年生と3年生間で1%水準で有意差あり
-.3684	n.s.	-.2754	* *	.3784	
* 専攻科学生と3年生間で5%水準で、1年生と3年生間で1%水準で有意差あり					
Q 14 子供を産んで育てることは、自分自身の成長につながる					
F (2,122)=6.62 P<.01					
1 年生		3 年生		専攻科学生	* 1 年生と3年生及び専攻科学生間で5%水準で有意差あり
1.2029	*	1.6486	n.s.	1.7368	
* 1 年生と3年生及び専攻科学生間で5%水準で有意差あり					
Q 16 子供を産んで育てなければ、女に生まれた甲斐がない					
F (2,122)=4.71 P<.02					
1 年生		専攻科学生		3 年生	* 1 年生と3年生のみに5%水準で有意差あり
-.5072	n.s.	-.1579	n.s.	.1081	
* 1 年生と3年生のみに5%水準で有意差あり					
Q 22 わが子のためなら、自分を犠牲にすることができる					
F (2,122)=4.32 P<.015					
専攻科学生		3 年生		1 年生	* 専攻科学生と1年生のみに5%水準で有意差あり
.5072	n.s.	.5676	n.s.	.7391	
* 専攻科学生と1年生のみに5%水準で有意差あり					
Q 26 育児に専念したいというのが、女の本音である					
F (2,122)=3.53 P<.032					
1 年生		専攻科学生		3 年生	* 1 年生と3年生のみに5%水準で有意差あり
-.3188	n.s.	-.2105	n.s.	.1622	
* 1 年生と3年生のみに5%水準で有意差あり					

\*\* p&lt;.01 \* p&lt;.05

1 年生と専攻科学生はマイナス得点、つまり否定を示し、3 年生はプラス得点で肯定を示していた。1 年生は子供を産んで育てることと女の生き甲斐とは異なるものとしており、それに比べ3 年生は子供を産んで育てることは女の生き甲斐であると肯定していた。

1 年生と3 年生の間で5%水準で有意差が認められた。

⑥ Q22 わが子のためなら、自分を犠牲にすることができる。

3 群ともに僅かながらプラス得点を示していた。1 年生は専攻科学生よりわが子のためにとい

表 9. 否定得点の分散分析で有意差が認められた質問項目とその結果

Q 3 妊娠した自分の姿は、想像するだけでみじめである				
F (2,122)=5.50 P<.01				
専攻科学生	1 年生	3 年生		* 専攻科学生と3年生間及び1年生と3年生間に5%水準で有意差であり
-1.6842	n.s.	-1.0870 *	-.8919	
Q 15 わが子を他人にあずけても、自分の仕事を続けるべきである				
F (2,122)=3.14 P<.05				
多重比較の結果有意差なし				
Q 27 母親が子供の成長を生き甲斐にするのは間違っている				
F (2,122)=3.55 P<.03				
1 年生	専攻科学生	3 年生		* 1年生と3年生間に5%水準で有意差あり
-.3768	n.s.	-.2105 n.s.	.1892	

\* P&lt;.05

う犠牲的精神が高い傾向を示していた。

1年生と専攻科学生間で5%水準で有意差が認められた。

⑦ Q26 育児に専念したいというのが女の本音である。

1年生と専攻科学生はマイナス得点を示し、3年生はプラス得点を示していた。1年生は育児に専念したいというのは女の本音ではないと否定しており、それに比べて、3年生は、肯定的傾向を示していた。

1年生と3年生間で5%水準で有意差が認められた。

(2) 有意差の認められた否定項目について

否定項目9項目の中で分散分析の結果、有意差の認められた3項目(表9)について、多重比較の結果は以下の通りであった。

① Q3 妊娠した自分の姿は、想像するだけでみじめである。

3群ともマイナス得点を示していた。

3群とも妊娠した姿をみじめとは思っていないが、その否定の程度は3年生は他の2群より高い傾向を示していた。

3年生は専攻科学生及び1年生間で5%水準で有意差が認められた。

② Q15 わが子を他人にあずけてでも自分の仕事を続けるべきである。

一元配置分散分析では5%水準で有意差が認められたが、多重比較では有意差は認められなかった。

③ Q27 母親が子供の成長を生き甲斐にするのは間違っている。

1年生及び専攻科学生はマイナス得点を示し、3年生はプラス得点を示していた。

1年生は、母親が子供の成長を生き甲斐とすることに肯定的であり、それに比べ3年生は母親が生き甲斐とすることには否定的反応であった。

1年生と3年生間に5%水準で有意差が認められた。

## 考 察

母性理念は、幼児期からの生育史のうちに生成され個人的諸経験を重ねることによって形成され変容するもの<sup>1)</sup>、更に青年期以降の教育や学習などの影響も受けて変容・形成していく<sup>2)</sup>とされている。

看護短大では母性看護学は必修であり、助産学専攻では専門的に母性について学習をしている。学生は好むと好まざるとにかかわらず、母性の疑似体験を講義・実習ですることになる。

このような教育背景をもつ学生を対象に、母性理念について、花沢式母性理念質問紙を用いて調査し、その結果から教育上の示唆が得られればと

考えた。

対象は全く母性の講義・実習を受けていない1年生、そのどちらも殆ど終了した3年生及び助産学を専攻して母性を専門に学習している専攻科学生の3学年として、一元配置分散分析及びScheffeの方法による多重比較を用いて分析した。調査の結果、学年間に有意差を認め、更に肯定項目、否定項目について学年間の比較をしたところ、有意差の認められた項目は7項目あり、同じく有意差を認められた否定項目は3項目あった。

肯定得点の学年間比較(表5)では、1年生が得点平均が一番低く7.4点を示し、肯定項目6項目において、3年生次いで専攻科学生との間に有意の対象になっていた。特に以下の4項目、Q1「妊娠は女にとって素晴らしい出来事である」、Q14「子供を産んで育てることは自分自身の成長につながる」、Q16「子供を産んで育てなければ、女に生まれた甲斐がない」、Q26「育児に専念したいというのが、女の本音である」の項目は3群の中で1年生が一番低い値を示しており、他の2群との間に5%水準の有意性を表していた。1年生のこの得点の低さは母性看護学の学習の面から考えると、母性の講義・実習が行われていないために肯定できる物差しが他の2群と比べてまだないことによると思われる。また一般的に考えられるのは、現在の出生数の減少や家族形態の変化から、身近に妊婦や褥婦、新生児に接する機会が少なくなっている<sup>4)</sup>こと、また母性理念が認知されるのは成人期に達してから<sup>1)</sup>とされ、平均19歳の未成年であることなどがむしろ関係しているのではと思われる。また、1年生はQ22「わが子のためなら自分を犠牲にすることができる」では、3群の中で高い肯定得点を示しており、及び有意差のあった否定項目Q27「母親が子供の成長を生き甲斐にするのは間違っている」では3群の中で否定得点が低かった。

親は自己を犠牲にし、子供はできるだけ親の持つ理想に近づこうとしている<sup>5)</sup>、まさにそれが身近なところで未成年の間で意識化していることも判った。

3年生は、3群の中で一番肯定得点が高かった。

Q1「妊娠は、女にとって素晴らしい出来事である」、Q13「育児は女に向いている仕事であるから、するのが自然である」、Q16「子供を産んで育てなければ、女に生まれた甲斐がない」、Q26「育児に専念したいというのが、女の本音である」の4項目は、3群の中で一番高い得点を示していた。3年生の肯定得点平均12.2点は、花沢の結果(1992)による初妊婦の妊娠歓喜群平均15.0点より低く、同じく妊娠困惑群平均10.3点より高く、そのやや中間を示している。3年生は初妊婦に近く、伝統的母親役割を認めていると思われる。また否定項目で有意差の認められたQ3「妊娠した自分の姿は、想像するだけで惨めである」の項目は3群の中で一番否定度が高く、Q27「母親が子供の成長を生き甲斐にするのは間違っている」は、3群の中では唯一肯定に転じていた。3年生は肯定得点が高く、かつ一部否定得点も高いことから、全体的に他の2群と比べて伝統的母親役割を肯定していると思われる。母性看護では母親の役割を正しく評価し尊重し、すべての母性に正しく母性意識をはぐくませ、健全な母性機能を果たせるように援助する<sup>6)</sup>ことを目的としている。したがって、母性看護学を習得する上で学生自身に望まれることは、母性としての自覚と母性としての成熟である<sup>4)</sup>といわれる。3週間の短い実習ではあるが、母性の実習は、ダイナミックスに動く時期で見えやすいし見せやすい場である。出産の場は感動の場であり、授乳の場は幸せに満ちた場である<sup>7)</sup>として母性意識への働きかけの場としては最適と考えられる。イメージは現実から作られるもの<sup>8)</sup>であり、母性に関する講義・実習は母性の変容・形成に良い方向に作用しているように、肯定得点の高さから伺われる。

専攻科学生は、有意差の認められた肯定得点において、3群の中では中間の位置を示していた。Q1「妊娠は女にとって素晴らしい出来事である」、Q16「子供を産んで育てなければ、女に生まれた甲斐がない」、Q26「育児に専念したいというのが、女の本音である」がそれであった。また否定項目Q27「母親が子供の成長を生き甲斐にするのは間違っている」においても同様であった。そし



て、専攻科学生の否定得点平均-3.6点は花沢の結果(表3)による初妊婦の妊娠歓喜群平均-3.5点にほぼ一致していることから、伝統的母親役割を否定する感情に共通するものがあるように思われた。助産学は、母性の役割を担っている女性を対象に、生物学的、社会学的、心理学的な知識を用いて、性機能を焦点に母性各期の看護問題を解決し、更に母性を取り巻く家族や地域のニーズに対応するヘルスケアを提供するための専門的アプローチ<sup>7)</sup>である。

3群の中で有意差検定で中間の位置を示していた肯定項目及び否定項目の4項目から、母親の伝統的役割の考え方は、講義・実習の影響によるものと推測される。

以上3群の比較の考察をしてきたが、しかしながら、今回の調査対象には4歳の平均年齢差があり、身体的にも精神的にも成長期にあることから、あるいはこれらのことが潜在的な要因となっている可能性もあり、検討が必要である。

### ま と め

母性理念の変容・形成について、看護学生及び助産婦学生の間にはどのような差があるのか調査した結果以下のことが判明した。

1年生は、母性理念肯定得点いわゆる伝統的母親役割を肯定する得点が一番低かった。

これは講義・実習がまだ入っていないことや未成年という年齢的關係及び現代の家族社会的背景が関係していると思われた。

3年生は、反対に伝統的母親役割を高く肯定していた。

母性理念について、3群全体の反応は一般的、標準的であったが、個別に分析してみると3年生は、初産婦に近い位置で母性を認識していた。こ

れは、母性の講義・実習が大きく関与し母性の性役割を高く評価していると思われる。

専攻科学生は、否定得点いわゆる伝統的母親役割を否定する得点が3群の中で、一番低かった。これは、他の要因による影響を完全に否定できないが、母性を専門に学習している講義・実習の内容が関係しているためと推測された。

### 謝 辞

今回の調査データの一部は、平成6年度在籍した専攻科学生泉さおりさんが、助産学研究のために収集したものである。

紙面を借りてお礼を申し述べます。

### 文 献

- 1) 花沢成一：母性心理学，第1版，医学書院，東京，1992，p.1-4
- 2) 森下節子：母性看護学臨床実習における母子関係成立のプロセス学習—褥婦の乳房に対する学生の感情の動きを分析して—，看護教育，**26**，175-178，1985
- 3) 竹ノ上ケイ子，内海 滉：看護学生の母性の発達に関する研究(1)，日本看護研究学会雑誌，**13**，35-46，1990
- 4) 森下節子，島田千恵子：看護学生の母性意識に対する—考察—レポート課題“私の産まれた時を採用して”—，看護教育，**24**，793-798，1983
- 5) 柴田芳江：臨床から見た「母性」，助産婦雑誌，**41**，26-32，1987
- 6) 看護学大辞典(第2版)：メジカルフレンド社，1982，p.1731
- 7) 青木康子，竹内美恵子，坂本万千子ほか：基礎教育課程における母性看護学と助産婦教育—それぞれの役割と課題— 助産婦雑誌，**36**，24-36，1982
- 8) 中沢和子：子供のイメージと成長，教育と医学，**31**，14-15，1983